きびのさと

NO.110
月刊
昭和四十二年八月一日 発行（非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町一三五 宇垣方（呼電四三七）
吉備観光協会
第10号 号フブき

○ 浄泉山正法寺（その二）

昭和廿五年に鐘楼に再鋳された梵鐘はここに朝夕鐘聲はもとに戻り、余韻嫋々として金山の森にこだましている。

鐘銘に　昭和庚寅廿五年春　浄泉山正法寺　三十世　日鳳代
南無妙法蓮華経　世界平和　五穀豊穣　除病延命　南無大梵帝釈天王

と四方に寄附者名を胴面に刻んでいる。鋳造師は備後国新市町高田鋳造所作である。

帝釈堂はいうまでもなく祭祀する所は帝釈天王である。堂内には帝釈天王が鬼神の姿をあらわし頭髪を乱し、右に宝剣を持ったいかめしい尊容を具現した銅像がある。

これはこの寺に現身し衆生の邪道に彷徨しつつあるものを打破せんとする姿である。

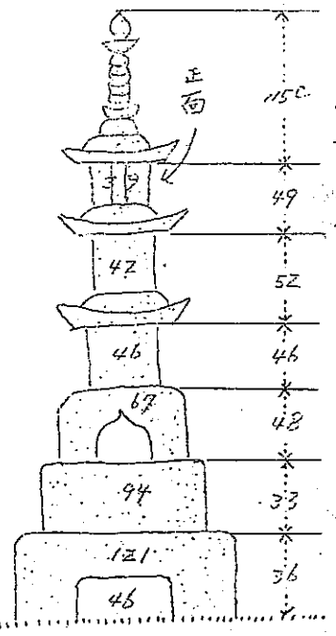
この尊像は昭和廿九年四月大阪北堀江に住する田辺　勇という篤信者が總工事十五万円余を寄進して建てられたもので身長二尺二寸、鉄に銅を張って鋳造されている。

堂の右側に隣りして岩倉明神堂がある。これは五十年程前に建立した社殿造である。

堂にその奥に白壁の塀をめぐらした中央に風変りな石造の供養塔一基がある。地上総丈三尺五寸にして構造は二段の台石の上に華灯形の台石を置きその上に三重の石塔を載せ外重収たものである。

三重の塔石の正面には「大覚大僧正」、左面には「当山開基　観達院　日道代」右面には「宝暦十三癸未四月三日」、と刻んでありこれは五十年程前に建立した社殿造である。

二重の塔石の正面には「南無日朗菩薩、南無日蓮大菩薩、南無日像菩薩」の三高僧を列べて刻んでいる。石塔の前の水鉢石の正面に「奉捧　日道代」。左面に「備国山住　太田性孝軌」。右面に「宝暦十三癸未四月三日」、とある。



石塔見取図

この石塔は滋賀県蒲生郡石塔寺にある特別保護建造物に指定されている石塔と同形のものであるこれに模してつくられたものではないかと考へられる。

伝説によると仏滅后百年の後ち阿育王が八万四千の舎利塔（仏舎利）を諸国に配置したと伝へられ、我国には琵琶湖の沖ノ白石とこの石塔寺の二箇所に建てられたが霊感の告げによって寛弘三年（一〇〇六）二月に一條天皇が平　恒昌に勅してこの石塔の所在を確められた。

この時矢野光盛というものが犬を連れて山を探していた夜、犬が或る塚を繞って吠へるので掘ってみると三層の宝塔が出てきた。そこで石塔寺という寺院を建立したという。この石塔は高さ十米九あり、その制は奇古にして本邦製の石塔と異っているので阿育王の造営したものではないかといわれている。これは石造三層塔で各層の間の軸部の高いのが特徴で類例がなく　その形状は朝鮮慶州にある仏国寺の石塔と同形という。

供養塔に詰づるに上、下二段に切かれた石段がある。上段の石柱の銘には

右側　発起人　当村女講中（西花尻）　施主　東平野村　佐藤勝次郎

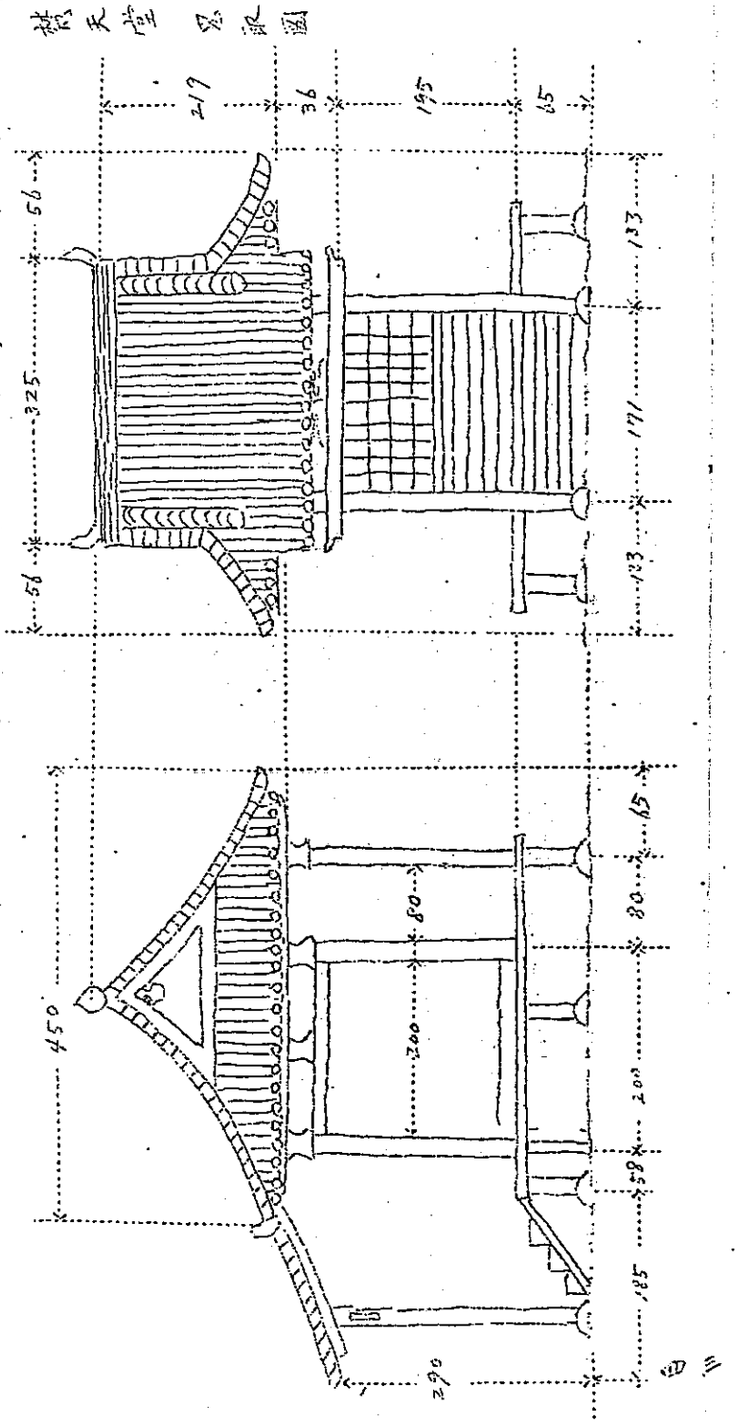
左側　施主　古新田　小林牧平
同　川入村　高木伊三郎
同　庭瀬村　高木久太郎
同　西平野村太田寿之助

明治廿五年四五月吉日

下段の銘に　右側　奉寄進　在町　当村信者中　水嶋久左エ門　難波小平太
左側　祭祀人　太田助内　野崎金右エ門
文政丁亥十年八月

狭義塔の右手に梵天堂というお堂がある。祭祀する處は大梵天王にして諸堂中最も古く規模は小さいが、近郊には稀に多る建築様式を備へている。棟瓦には梅鉢の紋様を配しているこれは菅原道真の家紋にしてもとどこかにあつた天神宮の建物を移したものではなかろうか。また旧庭瀬藩主戸川氏の定紋でもありまた戸川氏の寄進にかかるものとも考へられる。

△　仏教上の説を借るとこの帝釈天王、大梵天王（帝釈天王というは往昔インドの須弥山頂の切利天喜見城の主といわれ、また大梵天王は天地創造の神といわれている）と申すは大古天竺（インド）に三十三天王の偉い仏様が居られた。そのうちの上位にあつて支配せられ、あらゆる仏法を守護されたと伝へられる天王である。そして六十日毎に人界にくだつて我等衆生の願望を達成せしめて下さるというのである、広く崇め奉るのである



△　徳川家康が三十三歳奥平久賀斎から奥山流創法の伝授を受けた時、その記録文の一神仏にちかいの証文」に

梵天大釈四天王、別しては摩利支天、熊野三社惣じて日本国中大小神祇、右相傳の太刀他見あるまじく候　但し以前に存知候太刀　此外たるべく候　若此儀偽るにおいては　右の神罰蒙るべき者也　よつて件の如し

拾月廿八日（天正二年）　家康　花押　血判

の古文書がある。家康が梵天・大釈　摩利支天を筆頭に書いていることは、その信仰に篤かつたことを示したものである。摩利支天については本了院の項参照のこと。

〻つの時代からか大釈天（帝釈天）という仏様を信に庚申と呼んでいる。庚申とは干支（えと）にある「かのえさる」にして、古来から「かのえる」と云う言葉に通じて、ついに信仰化し庚申の日を帝釈天の縁日に定めたもので「申」は猿の意に通じて動物崇拝の対照となって、白猿を使者に祭りあげて願望を叶え、悪を去ることを祀ったのである。即ち三猿「悪を見ざる、悪を聞かざる、悪を言わざる」の諺を傳えて教化せられ、宗派を超越して信仰の的となり、厄除、開運、心願成就の祈りを捧げ常に帝釈天の祭りを忘らぬと観面に御利益があるとされている。

縁日には豆腐、コンニャクを食べる習慣も起った。縁日は庚申の日を起算して六十日目毎に祭りが行われる。四暦十二月八日は古来からこの日を八日待ち庚申様といっている。信に嘘私心庚申ともいって、この日には人間が一年中嘘言したことを仏様の前に詫笠礼拝して懺悔するのである。嘘を綴まとめにして年の暮を押い、新しい年を迎えて盛運を祈るのである。誠に高壱人は取引の関係上方便として駆け引きというものであるから罪障消滅のために信仰するものが多く、家内には神棚を設けて庚申様を祭り毎朝祈願して財運福運を授かろうという風習もこれに始まったのである。

徳川時代の俗言に：庚申の夜に孕んだ子は長じて盗人になる。という傳へがあって庚民はこれを忌み、生れながらにして悪の道に入ることの因果を恐れ、庚申の宵には灰の間に三猿の幅をかけ供物を飾って家内中ここにつどい、誰れも眠らず夜を徹し東の空のしらむ頃まで歓談に花を咲かせるという習慣も生れてきた。

この正法寺は庚申の祭りによってその名が知られ、遠近に多くの信者を有し縁日には自動車を連ねて善男善女の参詣でお山は賑うのである。

△　△

正法寺山門の棟札に「普光明院五男天龍院建之　嘉永五年壬子九月廿三日　長師（以下不明）」これは左側にして、右側には「正二位藤原大納言普光明院口口口淨泉山正法寺廿三世智覚院」と割んでいる。この藤原大納言普光明院とは如何なる人物か、また当寺との関係について知るべき文献の微すべきものはないが、大納言の五男何某が帝釈天を信仰し父の菩提のために当山に寄進したものではなりかと思われる。

庚申山は奥谷の山ふところに包まれた閑静な山道を辿ること六丁町で達する五陵にして、吉備の中山の一角をなし天藤沼山と神主山の中間にある。庚申堂はその中腹に鎮坐している。

庚申堂から頂上まで五、六町、ここは備前と備中の境界にして一宮町に接している。吉備津彦命の御陵墓は眼前にみえ、轡じく目を南に廻せば吉備町の平地は麓るものなく一瞬のうちに收められ、庭瀬、撫川の人家は箱庭式の如く、汽車は白煙を吐きながら（現在は電気機関車）玩具のようにその間を縫うて走っている。大田田の高地から児島へかけて望まれる視界の景観は爽快たとへるものはない。北へ山道を辿って吉備津神社へ出で、賀陽郡庄をみて足守川の堤防にたどりつき、天正の昔同胞同士が争った高松城水攻めの古戦場を偲びながら庭瀬に帰る道程は、一日の「ハイキング」として好適であろう。

歴代の住職

開基　智円坊日泉聖人

開山　正蔵院日定聖人（前岡山蓮昌寺住職）　年代不詳　寛文の頃か

第二世法住院日長聖人　元禄七年九月七日示寂

三　浄蓮院日在聖人　年代不詳　正保の頃か

四　学明院日悟聖人　享保九年六月十二日示寂（五世不明）
六　了享院四善聖人　年代不詳　寛保の頃か
七　智明院日成聖人　〃　寛延の頃か
八　中興　観達院日道聖人　宝暦年間（九世不明）
一〇　不軽院日成聖人　安永年間（十世不明）
一一　成就院日瑛聖人　天保元年九月十二日示寂（以下不明）
一二　一口院日深聖人　嘉永二年十一月十六日示寂
一三　智覚院日庚聖人　明治四年七月廿二日示寂
一四　智蓮院日教聖人　明治廿七年十一月八日示寂（以下不明）
一八　是観院日照聖人　昭和十三年二月十二日寂　俗名赤水姓　西花尾の出身
一九　霊就院日飲聖人　昭和廿年十二月十二日寂五十六才　俗名垣本孝仁、長崎の出身
二〇　大泉院日鳳（現住）　俗名大島孝照　長崎の出身

一二世成就院日瑛聖人は俗に兩元の聖人といわれ、千天続の時祈願して霊験を多らわしたという。墓は山門をメつた右側にある。高さ六十糎、上部に水溜べあつて手水鉢の形になつている風変りな珍らしい墓石である。これは聖人が生前に余の弘法はなにも墓前に供える必要はない。自然の恵沢による雨水でよい。博愛の供養はいらぬと遺言しつくつたものといわれている。

○

東林山真如院

当寺院は吉備町川入の東山、吉備の中山の中腹にある。旧名は東山真如院仙童寺という丈谷泉にして本尊は傳教大師の自作といわれる木造立像、高さ一尺七寸五分の阿弥陀如来を安置している。佛頭の内部に墨書にて

宝治二年戊申六月四庚辰巳時眼畢　願主　僧明円　佛師廣慶法印
（一二四八）（午前十時）

結縁衆　加陽高親　常阿弥陀佛　円阿弥陀佛　母阿弥陀佛　修阿弥陀佛

と為る。阿弥陀如来は無量光佛無量寿佛ともいわれ衆生がこの御佛を念ずると極楽浄土に往生することが出来ると説かれている。極楽浄土とは西方百万億土に苦悩のない極楽の世界があり御本尊はその教主と佛典にある。

吉備津へ通ずる東山の里道から右に折れて少し進み、石段を昇ると山門に出る。山門を潜ると正面に一棟の庫裡と客殿がある。その左手に南面する本堂とが廊下によつて連接している。山門のすぐ右に鐘楼堂と旃表碑がある。その左に無銘の石碑が建てられている。

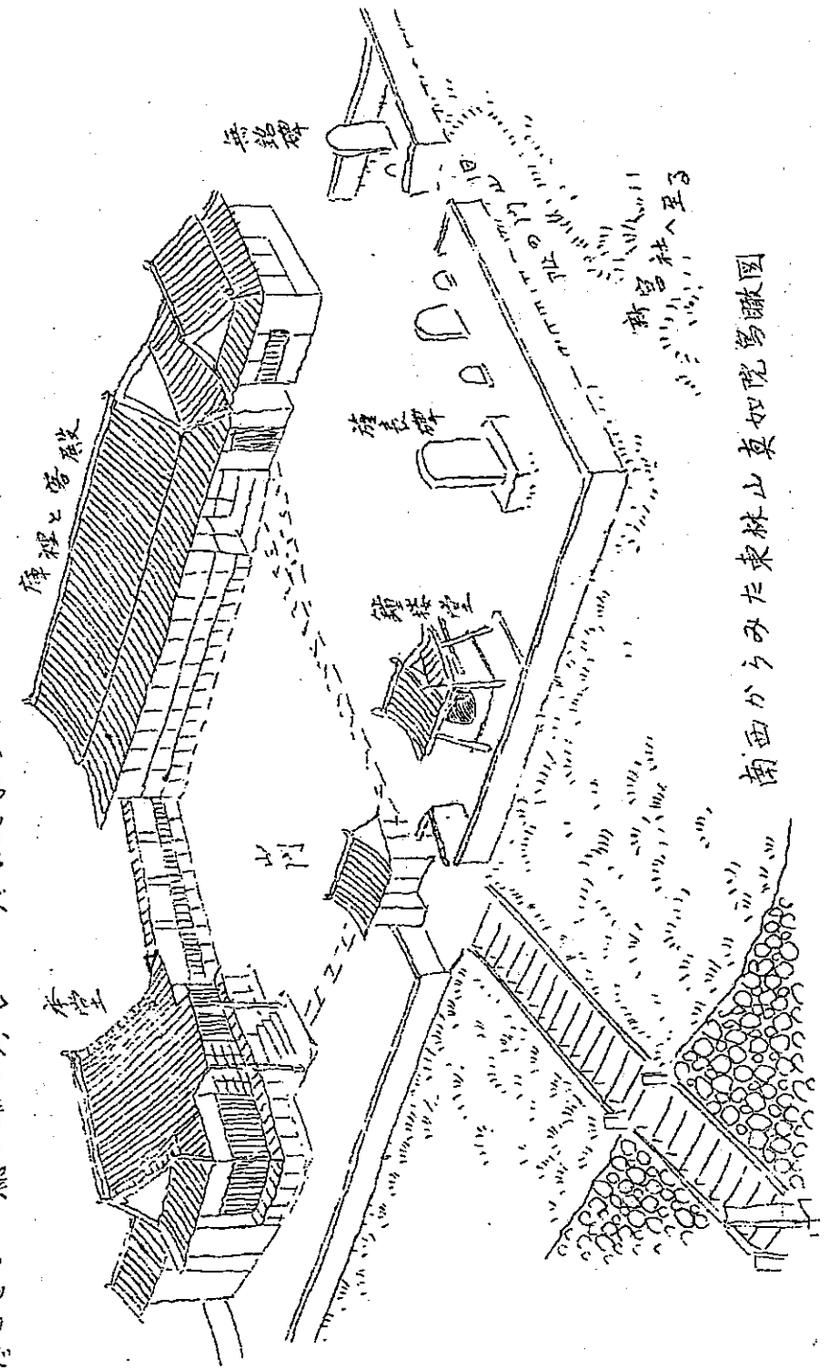
鐘楼堂の掲札の書に

当主住職　片岡義瑞　一鐘楼堂一宇寄附　字細所　浅沼亀右エ門　浅沼菊次郎
明治四拾参年庚戌九月

とある。もとこの堂は細所の氏神御崎宮にあつたが、神社整理の際御神体その他を吉備津神社へ合祀し鐘楼堂と梵鐘を共に真如院へ寄進したものである。この梵鐘は大東亜戦争に供出し、一時無鐘であつたが昭和廿六年四月八日檀信徒の協力によつて再鋳したのが現在の梵鐘である。その銘に

増田長太郎　根岩典右エ門　中山角次郎　伊丹滝治　浅沼勇吉の総代の氏名がある。

旃表碑は一段の台石の上に、高さ三米余の主石を置いている。



碑文は漢書にして明治三十五年当山の住職義瑞僧都が三十九歳の時の撰するもので、書は大養木堂が四十歳の筆である。最勝院恵勇道全大居士の法諡が刻んである。最勝院は東山の出身で本名を増田典右エ門といい、当主増田長太郎の弟である。廿一歳で明治三十三年北清事変に徴兵令により甲種合格し召集せられて砲兵輜卒に編入い清国（中国）に出征したが、戦地にて不幸病に罹り間もなく内地に送還の身となり広島病院にて病死したのである。（北清事変というは明治廿八九年の日清戦争が終つて排外運動が起り義和団が組織せられ朝廷の支持を得て各国の居留地を脅かしたので生命財産保護の目的で英・米・露・仏・伊・日の連合軍が北清に出兵し鎮圧した事件である。）

無銘の石碑はこの附近の山中から発掘した古墳の石棺の底蓋にしていつの頃か村民が運んだものである。始め松並木の馬場の中間にある溝の橋に使用していたが、明治三十年頃に祭りを虔れてここに建てたという。この底蓋は凝灰岩にてつくられており、露出部分は地上高さ一五二糎、幅九一糎、厚さ二四糎あり原形を推測する時は長さ二二〇糎にもなり、相当大規模な古墳であつたことが想像せられる。

この石碑の傍から新宮社あと へ行く道がある。往時は新宮の参道をのぼるのが当山への表道で、ここに山門があつたが明治以后神仏分離によつて現在の如く裏道を正面に替えたのである。

（おわり）　未完

消費者本位
吉備ストア
吉備町郵便局西隣
電話　吉備局四三四

飛竜　中華そば
有限会社　赤木製麺工場
吉備町撫川　電話吉備一七二番